

意外と Skill CHOMIRYO
ha igai to tsukaeru
調味料
スキル
は
使える
3

Toroneko

トロ猫

ill.

星夕

CHARACTER

Skill CHOMF
ha igai to
tsukaeru

エドワード

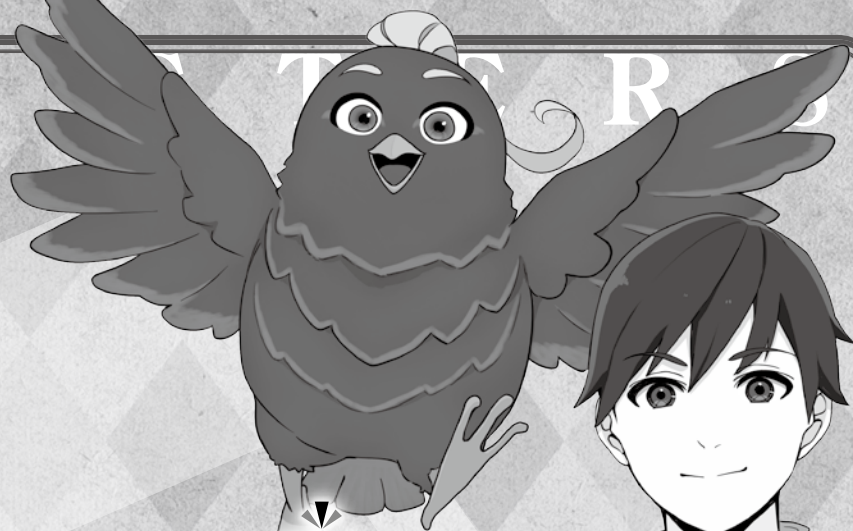
蒼騎士団の団長。
リツのことをいたく気に入っている。

マリエラ

エドワードの妹で蒼騎士団に
所属している。真面目で心優しい。

レネ

美しい毛並みを持つ
スリーピングキャット。マリエラに懐く。



サトウ

リツが手に入れた卵から生まれた、
メタル・ハービーイーグル。



キモイ

リツが出す
粉砂糖が大好物の、
食いしん坊スライム。
名前に反して
愛らしい。



八代 律

本作の主人公。
仕事帰りにエレベーター事故に巻き込まれ、
死んでしまう。
ボンコツタッチパネルのせいで、
まさかのスキル「調味料」を得て異世界に転生。

〇 じじまでの話

リスタ村のカーター家と別れ、ボールの街へ到着した俺——リツは、身分証を作るために仕事を探す。掃除ギルドのギルド長ユーシーとの出会いもあり、掃除屋として仕事を開始する。

相棒のスライム・キモイのおかげで掃除の仕事は順調に進んでいると思った矢先、下水道で探し物をしていた怪しい男たちと遭遇。男たちの探し物であった瀕死のメタル・ハーピーイーグルを発見したが、卵を残して命が尽きてしまう。卵は俺から魔力を吸収すると、真っ白な雛ひなが孵かえった。自動的にサトウと名づけられたメタル・ハーピーイーグルは俺がタイムしたことになるってしまった。

その後、掃除屋として受けた孤児院の掃除をきっかけに、俺は下水道に蔓延はびこる賊を「掃除」することになってしまう。下水道で発見したのは、様々な状態異常の魔物がいる実験施設だった。捕縛した犯罪者は、存在Aからの干渉を受けており、奴を神かのように崇めていた。

ボールの街から脅威が去ると、しばらく下水道の掃除に徹した。おかげでユーシーから身分証とたんまりの掃除代を手に入れた俺は、次の街フランスへと向けて出発するのだった。

1 ファレンスへの旅路

ついてないな……。

心の中でため息をつく。

ボールの街を出発して一日、早速足止めをくらう。

どうやら乗り合い馬車の車輪に繋がる一部分が壊れたらしく、御者がなんとか馬車を修理しようとしているが、数時間立ち往生している状態だ。

乗車していた全員が、修理の間外で何をするともなく修理が終わるのを待っている。御者が修理しやすいように馬車を数人で持ち上げはしたが、それ以上、俺たちに手伝えることはなかった。

暇だな。ひと眠りするか……。

昼過ぎの晴天の中、大の字で地面に寝転がる。日本だったらこの時間はあくせく働いていただろうな。昼間から惰眠を貪る。これに冷えたビールがあれば最高だったな。

欠伸あくびをすると、蝶を追いかけるのに飽きたキモイとサトウが俺の腹の上に飛び乗る。

「キユイ」

「ピーッ」

「オエエエ。やめろ、昼食ったもんが出てくるだろ！」

腹の上で飛び跳ねる二匹を落とす、横を向きながらもうひと眠りする。

夕方前、サトウの執拗しつようなデコへの突きつづきで目覚める。

「おい、地味に痛いからやめろ」

「ピーッ！」

「キユイ！」

地団駄を踏みながら二匹が飯の催促をする。そういえば、昼飯食わせてなかったな。

「腹が減ったのか？ 悪い悪い」

アイテムボックスから小型の魔物を取り出す。キモイはそのまま食えるが、サトウは切り分ける必要がある。

ナイフで魔物を細かく切る。

「この作業、結構グロいな。これくらいの大きさなら食えるだろ」

切り分けた魔物のピースを、サトウに少しずつ与える。すると、嬉しそうに羽をバタつかせた。

「お前、一応飛べる鳥らしいぞ」

ボールの街の掃除ギルド長ルーシーに報酬としてもらった魔物図鑑によれば、メタル・ハーピーイーグルであるサトウは通常生後三カ月で飛び始めるらしい。だが、魔物図鑑の生後二カ月のメタ

ル・ハービーイーグルの絵と、サトウの成長度合いが明らかに違う。

「お前、図鑑によるとまだ小さな雛鳥のはずなんだけどな」

どう見ても図鑑の絵より大きいサトウを持ち上げれば、三、四キ口はある。見かけはまだ雛っぽいけど……今後、どのように成長するのは正直未知数だな。

魔物を食い終わったサトウが、満足そうに口を開ける。

「ゲフウ」

「お前……俺の顔に向かってゲップをするとはいい度胸だな」

それから二匹をしばらく運動させた後、頭を抱えていた御者に声をかける。

「直すのは厳しそうか？」

「ああ、これはダメだろうな。すまんが、馬車はひとまずここに残す。馬だけを連れ、バールの街に戻る」

「そうか。分かった」

「ついてないな……」。

乗客はこのままバールに戻るかファレンスに向かうかの選択肢があった。だが、俺以外の乗客は徒歩の旅の準備をしていないからと、バールの街へと引き返す選択をした。

アイテムボックスにはそれなりの食材はあるし、体力もある。途中には宿泊できる村もあるようだ。それなら、問題はないだろう。

御者が持っていたファレンスへの地図を書き写す。ほぼ一本道だ。これなら大丈夫だろう。

「俺はこのままファレンスに向かう」

「兄さん、なんにも荷物を持ってないようだが、本当に大丈夫か？」

「ああ、問題ない」

「これ、運賃の払い戻しだ」

御者に運賃を返してもらっただけまだマシか。

バールの街に向かう人たちに軽く手を振り別れる。

「よし、少し時間はかかるだろうがファレンスに向かうぞ」

「キューイ！」

「ピーッ！」

キモイとサトウが元気良く返事をした。



ファレンスに向かって歩くこと数時間、辺りが暗くなり始める。

「今日はここまでだな」

道から外れた林の中に入り、腰を下ろす。索敵を続けているが、特に警戒するべき魔物や人などはいない。

種族補正のおかげで疲れてはいない。このまま歩き続けてもいいのだが、なんせ照明灯など全くないので、夜になると辺りは真っ暗になる。道は一応舗装されているが、たまに穴があり大きな石なども落ちている。急いでいるわけでもないから、安全第一で今日はここまでにする。

キモイは足が遅いので移動中は終始俺の頭の上にいたが、サトウは数十分ほど力強く歩いて、今は鞆の中で爆睡中だ。

焚き火とかの準備はないが、出発前にロコス焼きを十個購入したので、そのうちの一つを食う。

「やっぱ、美味しいなこれ」

結局徒歩になるのなら、野営の準備もしておくべきだったな。せつかく購入した米は、いまだに調理できていない。小鍋と魔法はあるが、調理しなくとも食いもんはある。今、わざわざ火起こしをする必要はない。米は食いたい……。

「どこかで米は炊きたいな」

「キユイ？」

「米が炊けたらキモイにも食わせてやる。美味いぞ」

「キユイ！」

「今は魔物で我慢だ」

触手を差し出してくるキモイに、粉砂糖をまぶした追加の魔物を与える。

サトウはまだ爆睡中、今日の数十分の歩きで疲れたようだ。

二個目のロコス焼きを食い終わると、サトウが鞆の中でモゾモゾし始め顔を出す。

「ピーッ」

「起きたか。今、餌を切ってやる」

サトウが満足すると全員で丸くなりひと眠りする。

翌朝、まだ薄暗い中、出発する。

一時間ほど歩くと、手前から来る馬に乗ったおっさんが手を振っているのが見えた。索敵を見る限り、敵対心はなさそうだ。手を振り返し足を止めると、おっさんが馬から降りながらぺこぺこ頭を下げる。

「出会い頭にすまん。もし、余分な塩があるなら分けてくれないか？ 金は払う」

「塩か。それは問題ないが、塩を持ってこなかったのか？」

「半日ほど前に、興奮した猪の親子に遭ってしまってたな。逃げるために一つ鞆を捨てたんだが、それに塩を入れててなあ。戻って探してみたが、猪に持っていかれたようだ。幸い食い物を入れていた鞆は無事なんだが」

「それは、大変だったな。塩なら余分にある。これくらいで足りるか？」

「助かる助かる」

小瓶に入れた塩を渡すと、おっさんから銅貨五枚を代金として渡される。バールの店で見た塩の

販売価格は、大きな袋で銅貨二、三枚だったと思う。

「もらいすぎだろ」

「いやいや、この先は村もなくバールまで一日以上かかる。ケチはせんよ」

「そうか。じゃあ遠慮なく受け取る」

ついでおっさんに猪のことを尋ねると、普段は道に出没しないはずの大物の猪だったそう。運が悪かったと苦い顔で言うおっさんから、猪が出没したという場所を聞いて地図で確認、その後に別れた。

それからしばらくゆっくりと歩いたが、ずっと続く似たような景色に飽きてしまう。気を紛らわすために、ストレッチをしてからジョギングに切り替え軽快に風を切った。

ジョギングをすること半日、塩を渡したおっさんの言っていた猪の出没地点に到着したところで、索敵に初めて映る紫の渦の表示に顔を顰める。

「なんだこれ」

紫の渦がある方向は、森の中だ。これは一体なんの表示だ？

地味に広範囲に映る紫の渦に、警戒心が高まる。

索敵で見える限り、紫の渦の周りには魔物も動物の気配もない。まるで、紫の渦を避けているかのように、離れた場所に緑の点がポツポツとあるのが見える。

これは素通りしてもいいのだが――

「念のために確認だけでもしておくか」

紫の渦がある森に入り、草木が生い茂った場所を歩くこと十数分。目的地に到着する。恐る恐る、木陰から紫の渦を確認して拍子抜けする。

「何もないのか……？」

索敵の紫の渦がある場所は、ただの行き止まりだった。行き止まりの崖を見上げる。

そこには、十メートルほどの高さの垂直の崖があるだけだ。

「まさかこの上じゃないよな」

この崖を登れないこともないが、わざわざ登る必要性を感じない。

「キュイ？」

「おい！ キモイ！」

キモイが行き止まりの前でウロウロしたと思ったら、壁に体当たりをして……消えた？どこに行った！

索敵でキモイを確認するが、表示が見当たらない。これ、ヤバくないか？

「ピーー！」

サトウが勢い良く鞆から出てくると、壁を凝視した。

「サトウ、キモイがどこに行ったのか分かるのか？」

「ピー！」

そう元気良く返事をする、サトウは壁の中にゆっくりと入っていった。

「は？」

この壁、目くらましなのか？ それなら、と勢い良く壁に突進――

「痛ってえ」

思いつきり壁に頭を打ち、しばらく悶える。

なんだよ。この壁、入れねえのかよ！ 紛らわしいな。

気を取り直し、サトウのようにゆっくりと壁に入ろうとしたが、これも失敗する。

壁を叩き叫ぶ。

「おい！ キモイ、サトウ！」

索敵を確かめるが、先ほどと同じように紫の渦しか映っていない。

まさか、死んだのか？

「いや、そんなはずはない」

急いでステータスを開き、二匹のタイムの情報を確認、安堵のため息を漏らす。二匹ともまだタイムされている状態なので生きている。だが、二匹を表示するマップにもその姿はない。

アイテムボックスから作り溜めしていた粉砂糖を出し、壁の前に盛る。

「キモイ、粉砂糖だぞ！」

反応はない。これは異常事態だ。

試しに粉砂糖の瓶を壁に投げると、そのまま通り抜け消えていった。

「この壁……もしかしたら、人だけを通さないのか？」

石や草を投げ込むと、全て通った。それが分かったのはいいのだが、俺が入れないって状況は変わらない。

これ、どうすればいいんだ？

しばらく考えていたら、キモイとサトウが勢い良く壁から飛び出し抱きついてきた。

「キュイ！ キュイ！」

「ピー！ ピー！」

「お前ら、勝手な行動をすんなよ。心配するだろうが！」

キモイは粉砂糖の瓶をしっかりと蝕手に持っていたが、壁を見ながら何かを訴えている。サトウも羽をバタつかせ興奮しているようだが、なんだ？ この渦が危険なのか？

「とりあえず、離れるか」

なんだか非常に嫌な予感がした。その場を後にして歩き出す、すぐに鐘が反響するような音が耳に響いた。振り向くと、後方の壁に渦のような形が現れるのが肉眼で見えた。

「逃げるぞ！」

即座にキモイとサトウを抱え走り出したが、暴風に足元をすくわれ壁の中へと一気に吸い込まれ

てしまふ。

一瞬だったため何が起こったかも分からずに、硬い岩に背中をぶつけ地面へと落ちる。

2 ご都合主義

「痛てえな、おい！」

背中に治療をかけながら立ち上がる。

怪我はしていない。だが、辺りは真っ暗で何も見えない。

『ライト』

光を灯すと、目の前には岩の壁が聳え立っていた。キモイとサトウも怪我はしていないようでもずは一安心する。

岩に軽く触れるが、案の定、その見かけ通り硬い。

「いや、ここから入ってきたんだよな？」

「キユイ？」

「ビイ？」

キモイが首を傾げると、つられてサトウも首を傾げた。まあ……そうだよな。二匹に聞いても答

えはないよな。

どうにか外に出られないか、岩の壁を押したり叩いたりしたが、壁を通り抜けることはできなかった。吸い込まれて閉じ込められるとは、まるでトラップだな。

「キモイは外に出られるか？」

キモイが何度か壁にぶつかり、シュンとする。

「キユイ……」

「いやいや、お前のせいじゃないから。そんなに落ち込むな」

しかし、ここは狭いな……。

手を伸ばせば、簡単に両壁に手がついた。狭い道は、まるで岩の狭間に落ちたかのような。右方向は行き止まりだが、左は奥まで続いているようだ。ここは一体なんだ？

索敵をかけると、進める方角に赤い点がいくつもあるのが見えた。魔物までいんのかよ。

タイムした魔物を示す機能を開き、周辺の地図を表示して目を見開く。

「なんだよ、これ」

地図は蟻の巣のように何階層にもなっており、まるで迷路のようだった。

「待てよ。これってもしかしてダンジョンなのか？」

そう呟くと、地図の最下部が金色に光り文字が浮かび上がった。

【出口】

「は？」

どういう意味だ。出口の意味は分かるが、なぜ急に……しかもギラギラの金色で出口と表示されている？ まるでゲームかのような感覚だが……まさか、存在Aか？ 奴の罠か？

魔法の粉を握りしめ、奴が飄々^{ひょうひょう}と現れるのを待ったが――

「来ないな」

よくよく考えてみたら、存在Aがご丁寧に出口を表示なんてするか？ いや、これも奴の嫌がらせの範疇^{はんしゅう}なのかもしれない。

「キュイキュイ！」

「ペイペイ！」

キモイとサトウが急に騒ぎ出す。

「なんだ、二匹してどうした」

「キュイ！」

キモイが蝕手で指したのは、創造主に勝手につけられた波の模様がついた金の指輪だった。すると指輪から金の砂が舞い上がり、徐々に空中に文字が形成された。

【このダンジョンでレベル50まで精進せよ】

ああ、これはあのクソ老人の仕業か……。

創造主だと名乗ったあの老人、自分の目的のためなら俺の意志なんてどうでもいいのだろうな。

「不親切を通り越して横暴だろ！」

叫んだが、俺の声はダンジョンの中でエコーするだけだった。

無視かよ！

どうやら最下部の出口まで行かない限り、このダンジョンからは脱出できないようだ。

舌打ちをしながらアイテムボックスを確認する。

食材は一応ある。ボールの街で旅路用に確保していた分だが、最下部までかかる時間の見当がつかないので心許ない。

「足りるといいが……」

「キュイ？」

キモイが俺を見上げながら両手を差し出す。

「なんだ、早速腹が減ったのか？」

「ペイペイ！」

「いや、サトウもかよ！」

二匹の餌に関しては、索敵に映る魔物どもでどうにかなるだろう。ひもじい顔をする二匹に、アイテムボックスに入っていた魔物を与える。

「それを食い終わったら出発だ。こんな場所はさっさと出るぞ」

ライトを灯したまま、狭い道を先に進む。

すぐに、索敵に映っていた最初の魔物と出会う。

「スライムか」

索敵の点の大きさから、弱い魔物だとは分かっていた。でも、まさかスライムだったとはな。

木剣でスライムを刺し、さっさと始末しようとすれば、急にスライムが飛びかかってきた。

「うおっ！　なんだ！」

木剣を振り、そのままスライムを壁に叩きつけると、鈍い音とともに破裂した。溶けるようにスライムの死骸が滴り落ちると、そのまま地面へと吸い込まれた。

魔物がダンジョンに還元されているのか？　キモイたちの餌にしようと思っていたのに、それは困る。

地面に残った核を拾う。これは残るのか……一応、鑑定をする。

【ダンジョンスライムの核】

ダンジョンスライムの核？　核自体はセメントを四角に固めたような形をしている。何に使えるか分からないが、待っておくか。

核より気になるのが、今のスライム……襲ってきたよな？　記憶にあるスライムは、あんなふうに攻撃をする感じではなかったが……。

「たまたまこの個体が襲ってきただけか？」

先を進めば、新手のスライムにも執拗に攻撃された。面倒だな。これは、ダンジョンの特別仕様なのか？　非常に困る仕様だ。

スライムは、倒す前ならばアイテムボックスに収納することができた。倒した後も地面にさえつかなければ、収納することは可能だ。

その後も、次々とダンジョンスライムが襲ってくる。スライムは弱い魔物なので実害はないが、量だけは多く鬱陶しい。

「ピイー！」

「キュイイイ」

俺の気持ちを通じたのか、キモイは水のビームを放ちながらスライムに穴を空け、サトウは嘸くちばしと脚の爪を使いスライムどもを蹴散らした。

「二匹とも凄いぞ！」

二匹のおかげで、俺のやることがほとんどなくなったがな。

数時間のスライムの嵐を通り抜ける。

「くー、やっと終わったか！」

アイテムボックスを見れば、ダンジョンスライムの核は三百を超えていた。感覚的には、十キロほどは歩いたと思う。道はずっと狭く暗かった。このダンジョンは嫌いだ。さっさとここから脱出したい。

精神的にも疲れたので、小休憩をする。

「二匹とも褒美だ！」

キモイには粉砂糖、サトウには細かくした魔物肉を与えた。

行く先の索敵を確認してため息をつく。この先にいるのはスライムよりも少々強い魔物だが、これもまた大量にいる。あの創造主、アホだろ。

道を進むとすぐに次の魔物が現れた。

【ダンジョン大鼠^{おおねずみ}】

猫ほどのサイズの鼠がウジャウジャいるな。面倒なので襲ってきた奴だけをアイテムボックスに入れながら進む。

索敵を確認して、安堵のため息をつく。

もうすぐ、この大鼠ゾーンも通過だ。

大鼠ゾーンを抜ける頃合いになると、急に身体が光り、目の前が眩しくなった。

「は？　なんだ！」

眩しさが収まり、目を開けると、先ほどと同じ場所にいた。キモイもサトウも側にいる。

「いや、違うな。同じ場所じゃねえ」

地図を確認すれば、大鼠ゾーンの手前にいた。

転移させられたのか？　何かトラップを踏んだのか？

「めんどくせえなあ」

仕方なくもう一度、大鼠ゾーンを通る。今度は鼠を無視しながらダッシュで通過する。先ほど転移させられた場所の手前で索敵をかける。

索敵には、何もおかしなトラップは映っていない。辺りを確認する限り、特に何か変わったこともない。

先を進めば、再び身体が光り……元の場所に転移させられた。

「は？」

なんでだ？　意味が分かんねえ。

俺が一体何をしたらって言うんだよ！

一人イラついていたら、指輪が光り文字が現れる。

【きちんと魔物を倒さなければ、レベル50にならないだろうが！】

あのクソ老人……大鼠を倒さずにアイテムボックスに収納していたから、俺たちを巻き戻したのか？ スライムゾーンは、それなりに倒したから問題なく通れたんだな。

「細けえんだよ」

壁を蹴りたかったが、痛そうなのでやめる。行き場のない怒りを抑え、ため息をつく。

あのクソ老人……干渉できないとかほざいていたくせに、これは干渉以外の何ものでもねえだろ。存在Aと同列に厄介な老人だ。今は味方してくれているようだが、いつそれが変わるか分かんねえな。

今はこのダンジョンからの脱出のため、とにかく現れた魔物がある程度始末するしかない。

「キモイ、サトウ、大鼠を見つけ次第、全部狩るぞ！」

「キュイ！」

「ピイイ！」

二匹ともまだまだ元気だな。

余計に三時間ほどかかったが、大鼠ゾーンを突破する。大量にいた大鼠を九割ほど仕留めた。塩

を投げつけて苦しむ大鼠を、刃風で一気に切り刻んだ。拾った大鼠の核の数を確認する。

【アイテムボックス】 ダンジョン大鼠×50、ダンジョン大鼠の死骸×200、ダンジョン大鼠の核×700

700以上ダンジョン大鼠を討伐した……これだけあれば、先に進めるだろう。

二回も転移させられた地点を恐る恐る通れば、問題なく通過する。

「よし！」

拳を上げ、索敵で次の魔物を確認する。

数は大鼠ほどいないが、急に倍くらい強くなっている。

キモイとサトウはやる気のように、俺を置いて先に進み始めた。二匹を抱え上げ止める。

「お前ら、勝手に突っ込むな。どんな敵がいるのか確認が先だ」

ライトを照らすと、奥の道は岩だらけだった。

これ、嫌な予感しかない。訝しげに辺りを鑑定する。

【ダンジョン大ガエル】

【ダンジョン大ガエル】

【ダンジョン大ガエル】

【ダンジョン大ガエル】

これは、もはや嫌がらせだろ。

今さら気づいたのだが、鑑定してもこいつらは名前しか出てこない。年齢やレベル等、何も表示がない。これも、このダンジョンの仕様なのだろうか。

岩になっっているカエルどもに、リスタ村でのトラウマを思い出しながら眉間に皺を寄せる。

思い出したくもないカエルとの事故のおかげか、こいつらに対しては怒りの感情が強い。以前より抵抗がないのはいいが、索敵を見る限りあちこちにバラバラにいる。

「とりあえず、一匹倒してみるか」

リスタ村のカエルと同じなら、水で活性化できるはずだ。

ウォーターを唱え、手前の岩にかける。すると、解放されるかのようにダンジョン大ガエルの生の姿が露^{あら}わになった。急いで一突き、カエルの脳天を剣で刺す。力を失い、地面に倒れたカエルはすぐに消えていった。

「楽だったな」

どうやら目覚めたばかりのカエルは弱いようだ。これなら鼠よりも簡単だ。

【ダンジョン大ガエルの核】

落ちていた核を拾うと、手に嫌な滑^{ぬめ}りがついた。汚ねえな……。

時間はかかるが、ゆっくり一匹ずつ仕留めれば問題は――

「ん？ なんの音だ」

水の音が聞こえ振り向くと、キモイが大量の水のシャワーを岩化しているカエルに向かって撒いていた。

「は？ おい！」

「キュイ？」

「キュイ？ じゃねえよ！」

「ゲコッ、ゴボッ」

始めは数匹だったカエルの声が、十匹、二十四匹と増えていく。ああ、キモイ！ とんでもないことしてくれたな！

「待て待て待て！」

焦りながら剣を構える俺の隣で、キモイとサトウが闘争心を燃やす。

「キュイ！」

「ビィ！」

二匹が突っ走ると、俺も覚悟を決める。
「クソッ！ 行くぞ！」



息を上げ、地面に片膝を突く。

「はあ……終わった……」

あれから襲いかかってくるダンジョン大ガエルを、ひたすら剣で突き刺しまくった。何匹倒したかまでは数えていないが、途中でレベルアップの機械音が一回聞こえた。
獲得した10ポイントをMPに振り当てる。

「ヤシロ リツ」	
L V ..	21歳 上位人族
H P ..	30
M P ..	80 (+50)
A T K ..	100 / 160
D E F ..	40 (+50)
L U K ..	20 (+50)
	26

スキル..
上位人族スキル..
【治療】【生活魔法】【素敵】【鑑定lv4】【風魔法lv4】【調味料lv7】
【言語】【アイテムボックス】【能力向上】

スキルの調味料、それから風魔法はもうすぐレベルアップしそうだ。試しにハバネロパウダーを二回生成すると、機械音が頭の中で流れた。

(調味料のレベルが上がりました)

よしよし。今度の調味料はなんだ？

【調味料Lv8】

塩 / MP 1
胡椒 / MP 1
マヨネーズ / MP 1
ハバネロパウダー / MP 5
粉砂糖 / MP 10
鰹節 / MP 10
酢 / MP 1

醤油／MP 15

「うおおお！ ついに、ついに醤油が出たぞ！」

ウキウキしながら醤油を出せば、液体のままの醤油が手の上にぶち撒けられた。

醤油に興奮して忘れていたが、そういう仕様だった……。

手から地面へと滴り落ちた醤油に、キモイが興味深そうに触れる。酔には拒絶反応を見せていたが、どうやら醤油は平気なようだ。

醤油はひとまずアイテムボックスへと入れる。後で瓶に移し替えるが、なんせ必要なMPが15と他の調味料より多い。

地面に落ちた分がもつたいないな……。

「ピー！ ピー！」

醤油を突こうとしたサトウを抱き上げ止める。

「お前はやめとけ」

キモイはスライムだから雑食だが、サトウはよく分からない。こんなダンジョンの中で体調でも悪くなられたら困る。

キモイが落ちていた醤油を全部啜ると、先を進んだ。

その後、大量のダンジョン蝙蝠、大猿、蜘蛛、蛇、ウルフを倒していく。このダンジョンは質より量なのか？

醤油も敵の目潰しには使える調味料だったが、MP消費の少ないハバネロパウダーの攻撃力が結局一番高かった。ハバネロパウダーは特にウルフには効いたようで、斬る前に悶絶しながら核に変わっていた。

大量の魔物を倒したおかげで、レベルは40まで上がった。受け取ったポイントは1000だ。

風魔法のレベルも上がり、新しい魔法が追加された。風魔法のレベルが上がるのは久しぶりだ。攻撃魔法だといいいのだが、どれどれ……。

【風魔法Lv5】

そよ風／MP 1

旋風／MP 5

突風／MP 10

刃風／MP 10

竜巻／MP 20

た、竜巻？ なんだか物騒だが、これは攻撃魔法だよな？ 試し撃ちがしたいが、この狭い空間でやるのは俺が被害を受けそうなのでやめておく。

ポイントだけを分配する。

「ヤシロ リツ」

21歳 上位人族

L V ..

40

H P ..

150

M P ..

200

A T K ..

100

D E F ..

100

L U K ..

26

【治療】【生活魔法】【素敵】【鑑定Lv4】【風魔法Lv5】【調味料Lv8】

スキル..

上位人族スキル..

【言語】【アイテムボックス】【能力向上】

HPに20、MPに40、ATKに10、それからDEFに30を分配した。一定の数字を越えたからか、今まで+50と表示されていた上位人族の恩恵が合算された。見やすくなつてありがたい。

最後に、落ちていたダンジョンウルフの核を拾うと、目の前に赤い扉が現れた。

「これはまた、怪しい扉が出たな」

この先は行き止まり、どうやらこの扉を通れということらしい。

扉を開けると、その先は空の上だった。目の前に広がる空に唾然とする。

「なんだよこれ……」

手を伸ばし、足元を確認する。足場は存在しているな……。

片足を空の上に乗せてみる。

「問題はないが、怖いな」

創造主の老人、マジで何を考えているんだ？ こんな演出いらねえだろ。

扉の先に向かう前に飯を食う。

せっかくなので、小鍋でボールで購入したインディカ米を炊いてみる。

蓋を開けると米の匂いがフワツとした。

「まあまあ、上手く炊けたな」

米の上に醤油をかけ、シンプルに食べる。焼き飯の劣化版だが、醤油は相当旨い種類なので問題はない。

肉と野菜を醤油で炒め、米に乗せ食う。

「美味い！」

「キュイキュイ！」

俺の服を引っ張りながら、飯をねだり始めたキモイ。美味くて独り占めをしていたな。

「悪い悪い。ほら、キモイの分だ」

皿に乗せた米をキモイの目の前に置くが、米をツンツンと触るだけで食べようとしな

「なんだ？ いらなのかな？」

「キュー！」

皿を下げようとすれば、キモイが米を一気食いつく。もう少し味わってくれてもいいのだが……。その後、キモイは米を再びねだったので味は気に入ったのだろう。

サトウは米には全く関心がなく、小さく切った魔物をいつも以上に食べていた。心なしか大きくなっている気がするのだが、レベルはまだ上がっていない。

「飯も食ったし、扉を通るか？」

扉越しの一面の空を見ながらため息をつく。これ、本当に大丈夫か？

進む道はここしかないので進むが……マップを確認すれば、結構広大な空間が広がっている。狭い場所心地よくなかったが、広すぎるのも困るな。索敵にはいくつか光る赤い点が見える。空に敵がいるのか、面倒だな。

勝手に行動しないようにキモイは頭の上に置き、サトウは鞆の中に入れる。サトウ……地味に重いな。

恐る恐る扉の先の足元を見る。スカイダイビングするような気分だな。足場があると分かっているのも怖い。片足を足場に着ける。足場はある、大丈夫だ。

まあ、何かあれば扉の中に戻ればいいだろう。

両足を扉の外に着けると、赤い扉はその姿を消した。それは聞いていないのだが……。

下を見ても碌なことはないと分かっている、地面を見てしまう。

「おお。怖えな」

尻辺りがムズムズとする。

これ、前方はどこまで足場が続いているんだ？

「念のために撒きながら行くか」

ハバネロパウダーの瓶を取り出し、足場に撒く。すると、付着した赤い粉が足場を示してくれる。風が吹いていないのは助かる。

足場の幅は一メートルほどだ。ハバネロパウダーのつかなかった場所に触れると、手が通り抜けた。持っていた魔物の骨を落とすと、そのまま落下、見えなくなった。これは、落ちたら確実に死ぬな……。

一歩ずつ、先を進む。これ、どこかで地上に到着するんだよね？ 創造主の老人の笑顔を思い出し、不安になる。

それでも、先を進むしかない。ハバネロパウダーを撒きながら一本道を進むと、索敵の赤い点が姿を現す。

【ダンジョンホーク】

鷹か。面倒だな。まだ距離はあるが、この距離でもその巨大さが分かる。ここは風魔法にハバネロパウダーを混ぜて潰しておくか。

準備をしていると、鞆からサトウが顔を出す。

「ペイ！」

「お、なんだ？」

「ペイペ！」

サトウは勇敢な表情で鞆から登場すると、羽を自分の胸に打ちつけながら何かを訴え始める。

「お前に任せろってことか？」

「ペイ！」

「大丈夫か？ 敵は十匹以上いるし、お前より大きいぞ」

「ペイー！」

「あ、待て——」

脚を地面に打ちつけながら羽を広げたサトウは、俺の話を聞かずにダンジョンホークのいる方角へと走り始めた。一体何をするつもりだ、お前まだちゃんと飛べないだろ！

俺の髪を引っ張りながら、キモイが飛び跳ねる。

「キュイキュイ！」

「痛てて。こら、引っ張んな！ 分かったから！」

ダンジョンホークのいる場所へ走り出したサトウを、ハバネロパウダーを撒きながら急いで追いかける。

サトウの近くまで到着。途中、急にサトウの足が速くなったな。

目の前で飛ぶダンジョンホークの大きさに息を呑む。

「鷹……デカくないか？」

サトウの五倍はある大きさだ。

「ペイペイ！」

サトウが羽を広げながらダンジョンホークを睨む。

「キエエエ」

ダンジョンホークから発される獠猛な威嚇音に耳が痛くなる。こんなの普通の鷹の鳴き声じゃないだろ。

「ペイ！」

サトウが羽をバタつかせながらやる気を見せているが、明らかに相手のほうが修羅場を潜ってきた経験者だ。あいつ、なに上級者の団体に喧嘩売ってんだよ！

ダンジョンホークがクルクルとサトウの上空を回り始める。これは良くないな。

ホークどもを蹴散らそうと刃風で攻撃をしたが、軽く避けられる。空は奴らのテリトリーだ。

「……分が悪いな」

ダンジョンホークの一匹がサトウに襲いかかると、次々と他のホークも続いた。

ヤバイ。このままだとサトウがやられる。そう思った瞬間、サトウの脚の爪から強い光が放たれ、眩しさに目を閉じてしまう。

光が止み、目を開けると、バランスを崩したダンジョンホーク二匹が羽根を散らしながら落下した。

お？　　どうということだ？

(個体名サトウのレベルが1上がりました)

頭の中で機械音が流れる。サトウのレベルアップだ。

【サトウ(0)】 良好 3 メタルクロー

再びサトウから光が放たれる。今度はこちらへの被害はなかったので、サトウの光を間近に観察することができた。

メタルに変化させた爪を日の光に反射させて、敵の目潰しをしているようだ。サトウは素早く飛

び上がると、目潰しをしたダンジョンホークをその鋭い爪で攻撃して落とした。

飛ぶのはまだまだ成長中だが、跳躍は驚くほど高い。サトウ……そんなことできたんだな。

サトウの頭上を見れば、猛スピードで降下するダンジョンホークが見えた。

「サトウ！　避ける！」

サトウの活躍に目を奪われてしまい、一歩出遅れたせいで間に合わない。刃風を使うか。いや、あのスピードでは上手く狙いを定められない。

『『竜巻』』

初めて使う風魔法だが、背に腹は代えられない。

魔法は間に合ったようだ……サトウの頭上に小さな竜巻が現れる。思ったよりも小さいな。だが、ダンジョンホークの進路の阻害はできたようだ。

「ピー！」

バランスを崩したダンジョンホークを、サトウの鋭い爪が抉る。

「ナイス、サトウ！」

サトウに駆け寄ろうとしたが、残っていたダンジョンホークに突き飛ばされ、通路から足を踏み外してしまい、落下してしまう。

「おい！　嘘だろ！」

猛スピードでフリーフォールする間、上空を虚無顔で見上げる。ああ、終わったな……。

叫べばいいものを、意外と冷静な自分に驚く。

地面に追突したら痛いだろうなあ。いまだに上空をクルクルと回るダンジョンホークとサトウが戦う姿が遠くなっていくのを眺めた。

(個体名サトウのレベルが1上がりました)

頭の中で機械音が流れる。サトウ、頑張れ……ああ、なんだか意識が遠のく――

「キュイイイ！」

頭にしがみつくキモイの大声でハツとする。いやいや、待て待て、まだ死にたくないぞ！

それに俺が死んだら、キモイとサトウはどうなるんだよ！

「クソがああああ！」

上空で回転、腹を下に両手を広げる。雲を抜けると、地上が見えた。普通に怖ええ。この状況、どうすんだよ！

『『突風』『突風』』

咄嗟に出した風魔法で、少しは空気抵抗が生まれるが、落下しているのには変わりない。

地上に到着する寸前にありったけの突風を出せば助かるのか？ 分かんねえ。

落ちるまでどれくらいの時間がある？ 長く感じたが、ここまでの時間が十五秒ほどだ。地上激

突まで一分あるかどうか？

『『竜巻』『竜巻』』

特にプランもなく焦って竜巻を出す。二つが融合すると、中くらいの竜巻が俺を押し上げる感覚がした。これ、いけるか？

『『竜巻』『竜巻』『竜巻』』

五つの竜巻が融合すると、想像以上に大きな一つの竜巻になった。風魔法を出すたびに反動で押し上げられたので、十数秒稼げたかもしれない。だが――

「このままだと竜巻に吞まれるじゃねえか！ ああああああ」

叫びながら落下していると、背中を思いつきり掴まれる感覚がした。ダンジョンホークか！

「ビィィィ」

「この声は、サトウか！」

背中を見る余裕はないが、どうやらサトウが俺の背中を掴んでいるようだ。飛べるようになったのかと喜んだのも束の間、竜巻の風に押されてバランスを崩しながら地面へと落下していく。竜巻、失敗だったか……。

クソッ！

『『突風』『突風』『突風』『突風』『突風』』

ウエッ。MP限界まで魔法を放ったことで、吐き気を催す。気持ち悪いが、落下のスピードはか

なり抑えられた。もう地面まであと数秒、腕で顔を守るように隠す。ああ、クソ痛いんだろうな。そう思いながら落下の時を待ったが、衝撃がない。なぜだ？

恐る恐る目を開けると、地面のほんの数センチ手前で浮いていた。

「は？ どういうことだ？」

「ペイイ！」

限界だ、とでも言うかのような鳴き声をサトウが上げると、ポトツと地面に顔から落とされる。

「痛ッ」

痛い、別に怪我などはしていない。

「助かったのか……？」

「ペイ！」

サトウを見て目を見開く。そこには、長い翼を自慢げに広げる成長したサトウの姿があった。

「サトウ……お前、成長しすぎだろ！」

灰色だった冠羽^{かんう}は光沢のある銀色に変わり、全体的に黒に青が混じっていた色が、さらに濃いグライダー^{グライダー}になった。

ダンジョンホークが強敵だったのか？ それにしては成長が早すぎる。この大きさ、もう鞆に収まることもできない。

サトウが幼い表情のまま、首を傾げながら俺を見つめる。



「ビィ？」

「いや、お前は何も悪くない。それどころか、ありがとうな。助かった」

本当に助かった。上空を見上げ、今さらだが悪寒が走る。あの雲の上から落ちてきたのか。よく、助かったな。絶対死ぬだろうと思った。

立ち上がろうとして、腰を抜かしていることに気づく。

自分が情けなくて思わず笑うと、キモイが嬉しそうに俺の太ももの上で飛び跳ねる。

「キュイ！ キュイ！」

「お前も怖かったよな？」

キモイを撫でると、蝕手を上げながら抱っこをせがまれた。

キモイに恐怖の感情があるかは分からないが、とりあえず全員無事で良かった。

安堵していると、急に頭の中で機械音が流れる。

(レベルが1上がりました)

(レベルが1上がりました)

(レベルが1上がりました)

(レベルが1上がりました)

(レベルが1上がりました)

「は？ 待て待て」

連続で流れた機械音のせいで頭痛がする。なんだ？ どういうことだ、これ？

音が収まったのでステータスを確認すれば、レベルは45まで上がっていた。

ログを確認する。ログの存在は以前から知っていたが、今回初めて確認した。

ログには討伐した記憶のないダンジョンラビットやダンジョンバイソンなどを含む魔物たちが、ズラリと並んでいた。

なんだ、この魔物ども……これではまるで災害――

「ああ！ あれか！ 竜巻！」

竜巻は上空で俺を押した後、逆方向へと向かっていった。今はどこに行ったのか見えないが、その進路で魔物どもを殺したのか。俺の魔法で引き起こされた大型の竜巻だから、その過程で討伐された魔物は俺のレベルアップに繋がるのか。

魔物たちにとっては災難だが、俺にとってはラッキーだな。

なんだかズルをした気分だが、レベル50まであと5アップで到達する。

このダンジョンに長居しないといけないと思ったが、意外に順調だな。

追加された50ポイントを振り分ける。

「ヤシロ リツ」

21歳 上位人族

L V ..

45

H P ..

160

M P ..

210

A T K ..

110

D E F ..

110

L U K ..

36

スキル ..

【治療】【生活魔法】【素敵】【鑑定Lv4】【風魔法Lv5】【調味料Lv8】

上位人族スキル ..

【言語】【アイテムボックス】【能力向上】

全てに10ポイントを入れた。

このダンジョンを脱出できるまでに必要なレベルは残り5だ。マップを確認する。最下層まで数層あるが、もしかしたらこれ以上深くダンジョンを潜らずとも脱出できそうじゃないか？

パタパタとサトウが羽を動かしながら軽く飛び上がる。まだ完全な飛行はできないようだが、これは飛ぶことができるまであと一歩つてところだな。

しかし、レベル上げか……もう一度竜巻を連打して、その辺にいるダンジョンの魔物を巻き込むか？

竜巻を唱えようとしたら、目の前の地面に再び赤い扉が現れた。

「……ご都合主義だな」

このダンジョン自体が創造主のご都合主義だ。

創造主の老人は、どうしても俺を最下層まで導きたいようだ。最下層に何がある——いや、何がいるんだ？

そんなことを考えながら、地面の赤い扉を開く。

扉の向こうには、褐色の岩がゴロゴロあるのが見えるが……素敵に魔物は映っていない。

「キモイ、サトウ、行けるか？」

「キューー！」

「ペイ！」

二匹ともまだまだ元氣のようだ。

「よし、行くぞ」

扉を通ると上下左右が逆転する。気持ち悪い感覚だ。

壁に位置していた赤い扉は、俺たちが通り抜けるとすぐに消えた。

辺りを見回し、ジワリと浮き出た額の汗を手で拭く。

「暑いな」

見る限り、多方向から蒸気が噴き出していた。ここは灼熱の階層ってところか。

キモイから湯気が上がり、フニャフニャになりながら地面に溶け始める。

「キュイイ……」

「は？ おいおい！」

急いでキモイを持ち上げ、ウォーターを連続してかける。

「キュイ……」

フニャフニャは治ったが、どうやらキモイに灼熱は天敵らしい。水属性のスライムだしな、そりゃそうだよな。

「お前は鞆の中にいろ」

鞆の中に押し込んだキモイから情けない声が聞こえる。

「キュイ」

「変に頑張る必要はないぞ」

苦手なものは仕方ない。サトウを見れば、平気そうに仁王立ちしていた。どうやら、サトウは問題がないようだ。

マップを確認、下層に繋がりそうな場所を目指して先を進む。



歩くこと一時間弱……暑い……。

ここ、なんなんだよ！

歩いても歩いても、目的の下層に繋がりそうな場所は見つからない。それに加え、魔物の反応も一切ない。そして、クソ暑い。上半身の服を脱ぎ、水を浴びる。

「ああ、生き返る」

鞆の中のキモイにも水をかける。

「キュイ！」

「気持ちいいだろ。暑さは大丈夫か？」

「キュイ！」

鞆の中なら大丈夫そうだが、早くこの灼熱層から出たいな。

サトウは力強く歩き、たまにジャンプしながら羽をバタつかせていた。以前より体力が上がったのか、疲れてはいないようだ。疲れていても、もう鞆に収まる大きさじゃないけどな。

「ピーー！」

「あ、コラコラ。背中にとまるのはやめろ！」

地味に爪が食い込むから、痛いんだよ！

タオルと服を腕に何重かに巻いた上にサトウがとまる。重いが、これくらいなら平気だ。こうやってサトウが腕にとまっているとなんだか鷹匠たかじょうみたいだな。

ファレンスに着いたら、サトウ専用の腕用の革の防具を新調しないと。そのためには、こんな

クソダンジョンは早く脱出しないと。

問題は、この階層、魔物が全くないのだが……。レベルアップどころか、脱水症状で枯れてしまう。

それから一時間ほど歩くと、辺りが暗くなり始める。ここ、夜があるのか？ 暗い中での移動は危険だ。ここで休憩するか。

日陰になった岩の下で野営の準備を終わらせると、違和感に気づく。

「なんだか涼しくなっていないか？」

キモイが鞆から出てきてピョンピョンと飛び跳ねる。

確実に涼しくなってきたているな。灼熱から寒くなるって、砂漠かよ！

アイテムボックスから出した服を重ね着する。ヤバいな。比較的暖かい地域にしかいなかったのに、防寒服がない。

まだ熱の残る岩を集め、刃風で斬り平べったくする。この上にブランケットを敷いて寝れば、少しの間は温かさを保てるだろう。燃やせるものも少ないが、いざとなったらアイテムボックスにある木製の食器などを燃やすしかないな。

どれだけ涼しくなるかわからないが、今は少し肌寒い。このまま氷点下などになってしまったらおしまいだ。暑いのも嫌だが、寒いのもっと困る。

「とりあえず、飯を食うか」

俺はロコス焼き、キモイとサトウにはいつもの魔物を与えた。サトウは、以前のように魔物を細かく切らなくても食べることができるようになった。丸呑みなので、その後に吐き出すものもデカくなるのだろうか……。

その後、岩の上で横になる。ホットブランケットを少し熱くした感じの温かさだ。これならすぐに眠りにつけそうだ。そんなことを考えていると、いつの間にか目を閉じていた。

3 ダンジョン脱出

それからどれほどの時間が経ったかわからないが、寒くて目が覚める。

まだ辺りは暗い。数時間くらいは寝られたか？

「それにしても寒みいな」

キモイとサトウが丸くなって引っついていて腹部分以外は、完全に冷えている。岩も温かさを失っている。吐息は白い。

「ヤバいな」

キモイとサトウを起こし、ブランケットを羽織る。時間の進みはわからないが、早く暖かくなっ